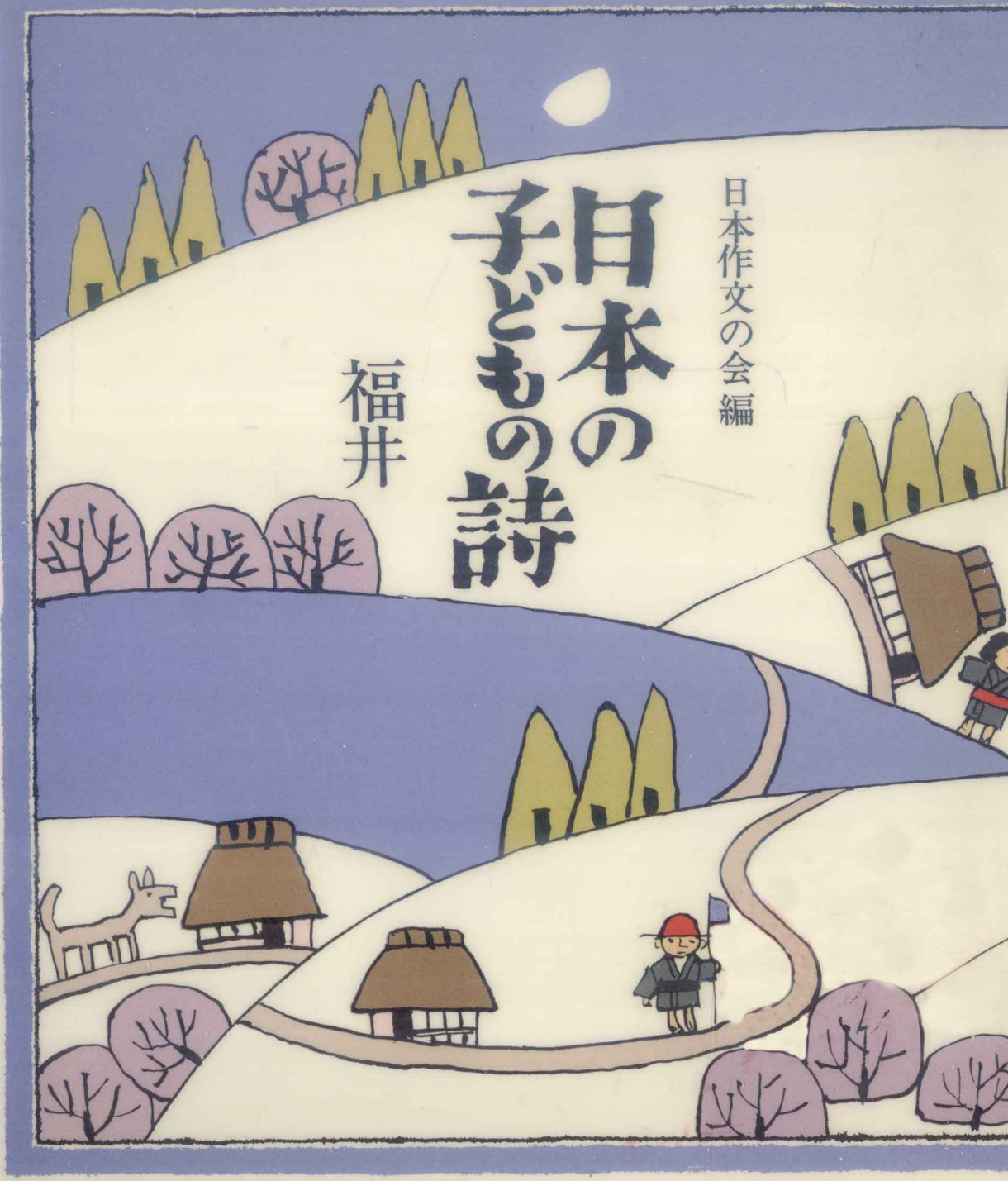


日本の子どもの詩

福井

日本作文の会編

日本の子どもの詩

群馬

日本作文の会 編

岩崎書店

日本の子どもの詩　10　群馬

一九八一年三月二〇日　初版発行

編　者　日本作文の会
発行者　森山甲雄
印刷所　株式会社　K・M・S
　　株式会社　金羊社
製本所　小高製本工業株式会社

発行所　岩崎書店
東京都文京区水道一―九―二
電話(〇三)八二一―九一三一(代)

©1981　Nippon, Sakubun no kai　〔分〕8392〔製〕108010〔出〕0360

はじめに

各都道府県別につくられた四十七冊のこの本ぜんたいには、一九一八年「赤い鳥」が創刊されてからあとの六〇年間につくられた、日本の子どもの詩のおもなものが、年代順にならべてあります。

これらの詩は、そのときどきによって、児童自由詩、童詩、児童詩、児童生活詩、生活童詩、生活綴方の詩などともよばれ、世界にもまれなものであります。

これらは、ねっしんな先生たちによる創造的な教育のいとなみとしてうまれたものですが、日本の子ども自身がつくりだした芸術（現代の子どもの〝わらべうた〟）としても、大きな意味がありましょう。

わたくしたちは、このことを頭において、念入りにこの本をつくりました。

この一冊は、そのうちの「群馬編」であります。どうぞ、ひとつひとつしずかにお読みください。

日本作文の会

もくじ

1918
〜
1945

8 たこ
まきわり
おうばい
はたおり
9 浅間山
雀
アサマ山
虹
10 梅の実
ぎんなん
秋
牛
11 春
夏の虫
雨
草刈
12 秋風
デンキ

1945
〜
1959

いちょう
ゆうぎと犬
13 子供
トンボ
ちこく
しずかな夜
レール
14 友の手紙
16 まえばしえき
およめさん
先生
17 うし
菜の花
18 母のかげ
たみお
19 学校と自分
20 炭しょい
きしゃ
むぎはこび
21 ゆうだち
三角点

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

ふろの火もし 22
けんか 23
夕立 24
せみ 25
波 26
じびき網と漁師 27
大水のあと 28
田んぼ 29
ペス 30
もぐら 31
せいこのむかえ 33
かんがえこむ 34
牛小屋の前で 35
ネッカチーフ 36
よこぶえ 38
うれしさ 39
父 40
洞窟観音 41
写真撮影 42
製糸女工 43
おれとおれの家 44
ランドセル 45
服 46
父の手 47
麦まき
父の苦労

1960
〜
1969

俺は百姓をやる
楽しさ
松本さん
ひろかず
農業かいぜん
うしはでかくなるとはなかんをする
まきわり
おかあちゃん
ぼくらの村を
木の芽
それほんとかや
転校
いちごもぎ
これでいいのか
マラソン練習
しあわせって
えをかくのはむずかしい
田の草とり
テレビを見て
戦争と沖縄
おかあさんびょうきです

くわきりをする母 48
田の草とり
ベトナム戦争反対の募金
ねえちゃんの日記 49
ナパーム弾 50
赤城山 51
父の肩
工場
かまきり 52
ふしぎなこと
秋の七草 53
みんな5だよ 54
ガリレイ
ひなたぼっこをするおばあさん 55
かえる
てつだい 56
とうちゃんのゆび
うさぎの子 57
おめんつくり
ねぎつくり 58
おばあさん 59
しいたけ 60
夫婦
じゅんちゃんのめ 61
こやし
しんぶんはいたつ 62
うれしいな
雪 63
おとうさん 64
もうふ
かあちゃん 65
思い出ばなし
むぎふみ 66
とうちゃんのまぶしごせえの歌
こがらし 67
父のうで 68
私
ワンピース 69
私 70

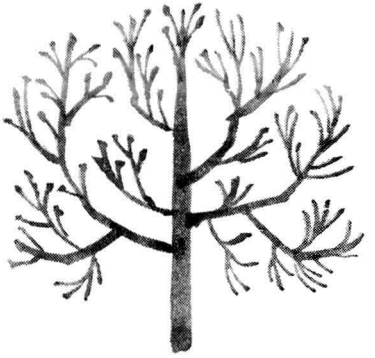
1970
〜
1979

ひょう 72
へちまがめをだした
おかしを食べていた先生 73
おもしろい おぎの君
にくらしかったこと 74
乳しぼりをする母 75
みつばち
牛のえさかり 76

ぼうずはいやだ 77
おじいちゃん 78
失われゆく故郷 79
母が詩を書いている 80
ふかい ぷうるで ういた
ざりがにのめ 81
おかあさんのばいく
おふろのメリーゴーランド 82
かにのあかちゃん
石 83
おとうさん
とうろう流し 84
じいちゃん
弟 85
さんさんくど
へび 86
豆うえ
桑くれ 87
おかあさんがわらった
しもばしら 88
ドッジボール
ふうせん
とんぼ 89
ひこうき雲
かまきり 90
やきいもや
勉強 91
人形
組立体そう 93
牛のぬかまき
土方にかよっていたとうちゃん
僕 94
孤独の部屋 95
ふとん 96
先生、たんけんにいったらね
おかあさんへおねがい
くっつきのじ 97
木の芽
たのむ詩 98
おねえちゃんでしょ
お父さんの手
牛乳配達 99
桑の木 100
どんどん焼き 101
とうちゃん
言えなかった ひとこと 102
牛 103
おたきあげ
兄貴 104
アスパラ作り 105

*

107 あとがき——群馬県の児童詩指導の歩み
110 この本の編集をした人たち



1918～1945

（大正７年）　（昭和20年）

ここからは、日本の子どもたちが詩を書くようになったはじめのころの作品。

＊雑誌「赤い鳥」のなかのもの。

＊雑誌「鑑賞文選」「綴方読本」などのなかのもの。

＊そのほかの雑誌に出ているもの。

＊そのころ発行された文集のなかのもの。

これらのなかの群馬県の子どもの詩がならんでいる。

たこ

羽塚米南　小2

ぼくのたこは　あがらないたこ
いつあげても　あがらないたこ。

前橋市桃井校

まきわり

塚越さだ子　小5

ヘントン、
ヘントン、
父さまが、
力を入れる、
まきわり父さま。

六郷校

おうばい

尾島はつ　小6

庭に、おうばいが
まっ黄いろに咲いている。
それを見ていると
なんだか心が美しくなってくる。

新田郡宝泉校

はたおり

丸山さつき　小5

私のお母さんがおってる
バッタンのひが
行ったりきたりする。
音が山へひびける。

新田郡鳥之郷校

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

浅間山

小林ひで子　小6

月が出た。
きれいだな。
山がすわっているようだ。
ちっとも厚みのない山だ。
空は金の煙。
山はあいの絵の具。

碓氷郡豊岡校

雀

渡辺はつこ　小6

夕方になると
どこから来るのか雀の群が
わいわい世間話をやっている。

高崎市中央校(指導)田島武夫

アサマ山

小菅静子　小1

アサマ山ハコンナサムイノニ
ナツノキモノキテイルネ。
ソレデモユクワイデスカ。
クロイケムリハドコデタツノ。
オナカノ中デスカ。

高崎市中央校(指導)田島武夫

虹

宮浦善太郎　小3

虹がせっぷくして、
七色さんごの
血を出せば、
それが雨になって
降ってくる。

高崎市東校

梅の実

高山みつ江　小5

梅の実がふくらんだ
まっさおで
しぶそうだ

邑楽郡大島校

ぎんなん

鈴木雄子　小4

秋らしくなった。
ぎんなんの葉、
ひのみよりも、
大きくとんでおちる、
秋の日によく光る。

邑楽郡大島校

秋

荒川シズエ　小6

学校のうらの畠で
百姓がいぶそうに
野火をたいている。
白い煙がすっと上っている。
しずかな昼だ。

邑楽郡伊奈良小(指導)萩野林道

牛

片柳誠一　小6

算数の
出来ない夕方
売られて行く
牛小屋の
牛を見る。
夕やけの牛。

高崎市中央校(指導)田島武夫

春

芝崎勝一　高1

電気工夫が
電柱の
番号札をはりかえています
暖かい春の
陽をあびながら

邑楽郡大川校

夏の虫

横田重六　高2

こんど立てられた新道のがい燈、
まるくにおうようだ。
むらがって夏の虫はうれしい。
ぼくは棚にもたれて見ている。

利根郡古馬牧北校

雨

松島ヨシ　小5

雨がふる
お家の窓には
うたうこえ
ポッタン　ポッタン
雨の音

山田郡大間々校

草刈

石関鶴治　高1

しっかりと鎌をにぎった
水のたれるような刃先き
ザクザクと気持ちよくきれる
広い草原だよ
私一人では刈りきれない

群馬郡六郷校

秋風

堀口久子　小5

青々とみのった稲ほ
九月の風に
吹かれながら
「すずしいね」
「すずしいね」
とおじぎしている

多野郡平井校

デンキ

オバラフミコ　小1

デンキハアカルイヨ
マムシイナ
ヨウクミタラバ
ニジノワガアッテ
キレイダヨ

前橋市桃井校(指導)石垣保

いちょう

木村トヨ　小2

いちょうの木、
すうっと高くのびている。
すずめが一わとまったら
きいろいはっぱがおちてきた。

前橋市桃井校(指導)石垣保

ゆうぎと犬

五十嵐政吉　小3

みんなが
ゆうぎをやっている
犬がぼんやり見ている

前橋市桃井校(指導)石垣保

子供

石崎里子　小4

父がひく
荷車の上に
子供　らくそうに
こくりこくりと
いねむりしている

前橋市桃井校(指導)石垣保

トンボ

菊池一郎　小1

イキノコッタアカトンボ
チカラナサソウニ
クワノハニトマッテイル

前橋市桃井校(指導)玉尾成器

ちこく

斎藤香子　小3

ちこくした
庭はしんとしている
私の耳にきこえるのはせいとのこえ
私は
教室の戸があけられなかった

前橋市桃井校(指導)玉尾成器

しずかな夜

斎藤　京　高1

みながねしずまった後を
ひとりで本を読んでいた。
電気がちょっと明るくなって
又暗くなった。
急にさびしくなって
バタンと本をとじた。

佐波郡芝根校

レール

坂本三郎　高2

どこまでも　どこまでも
長く
地の果までもつづいて行くレール
それは鈍重な真黒い冷い姿のレールだ
機関車にいつも圧しつぶされて
身うごきも反抗も出来ない位置なのだ
俺達が汽車に乗ったら
機関車よりもレールを忘れるな。
レールを忘れなかったら
熱と血とでレールを敷設した
線路工夫を忘れるな

高崎中央校

友の手紙

河原常雄　高1

「常雄、手紙が来たよ。」と
お父さんがお呼びになった。
誰だろうと思いながら、
うけとってうらを見る。
本迫君だ。
「やあ、ひさしぶり」と
ひとりごとのように、
手紙に呼びかける。
この手紙も六年生の時に
わかれる前に約束したのだ。
友の生活ぶり
機械との戦い
そのままに書かれてある。
文字も上達している。
見いるごとに
友の笑顔が
機械と組合った姿が
僕の目の前を通りすぎて行くようだ。
その友も恩師のお言葉を守り
りっぱな産業戦士となったのだ。
そう思うと手紙をにぎる手にも力がはいる。

桐生市昭和校

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com